

フランス學雜感・序

和田正美*

一

フランス學といふ言葉を最近、時々聞くことがある。これは日本における従来のフランス研究が何か特定の分野に偏つて総合的な展望を缺くところから、フランスの事象全般に話柄を及ぼし、しかもそれを通してフランスといふものの本質を明らかにするやうな學のことであり、その提唱者の一人である桑原武夫の文章を孫引きで引用すると次の如くである。⁽¹⁾

學問のあらゆる分野において専門分化はこんにちの大勢であつて、何びともこれを否定することはできない。またそれによつて學問は進歩するのだ。しかし、専門分化が進めば進むだけ、同時に総合化が不可欠となる。もしその努力を怠るならば、學問は視野が狭くな

り、けっきょく人間的でなくなること忘れてはならない。ただ、狭い専門領域での研究が學問的な印象を與えるのに對して、廣い見地からの概説は抽象的になりやすく、實證性に缺けるので非學問的と見なされるおそれがあるので、學者は必要性を知りながらこれを避ける風潮がある。フランス學についても同じであつて、日本にもドイツ人クルチウスのような幅廣い仕事があるべきなのだが、残念ながら、まだほとんど出ていないのである。

もつともな話であり、フランスの研究家は専門分野の如何を問はずよろしくフランス學の構築作業にいそむべきであると思ひたくもなるが、よく考へて見るとこの主張には疑問なしとしない。第一にフランス學なるものがあり得るとして、それは桑原が説くやうに狹義の學問にだけしかづらふものなのだらうか。なるほどクルチウスの『フランス文化論』は學問的な考察の對象になるであらうが、クルチウス自身は必ずしもそれを學問的な著作とは見做してゐなかつたのではないかと思はれる。手元にあるフランス學關係の書物を覗くと、その中にはフランス映畫の項目も含まれてゐるが、この項目の執筆者はフランス映畫の研究を學問研究の一部と心得てゐるわけではあるまい。フランス學を一箇の學であらしめるためには、そこから桑原的な學問臭は拂拭された方がいいやうに思ふのだが如何なものか。

またかういふこともある。文學を例にとると、フランス文學の研究家の中には最初にフランスへの興味があつて、フランスをよりよく知りたとい願ひ、そこでフランス研究の一環としてフランス文學の研究に取掛つたといふ人もゐるだらうが、研究家としてそれよりずっと正統的なのは、古今東西の文學を讀み漁つたその果てにフランス文學が自らの氣質

に最もよく合ふことを發見して、それを研究対象にしたといふ人々である。このタイプの研究家はフランスの何たるかをフランスの諸々の事象に即して究めたいとは、或は知りたいとは餘り思はないであらう。「學者は必要性を知りながらこれを避ける」とは一概に言へないのである。フランス料理の専門家は眞摯でありさへすれば、フランスの文化風土といふ問題にいづれぶつからずにはゐるまいが、その場合にも、彼が必要とするのはフランス料理の特性を際立たせる事柄に限られてしまふに違ひない。

かう見て來るとフランス學はそれが成立するかどうかといふ最も重要な、根本的な點に微妙で曖昧な要素を抱へこんでゐることにならう。

しかし以上の疑念にもかかはらず、フランス學はやはり存在すべきであり、是非それを日本に誕生させたいといふのが私の考へである。それもハンドブックのやうなものではなく——ハンドブックなら書ける人が大勢ゐるだらう——フランス學の名にふさはしい本格的なものが欲しい。その理由は次の通りである。

文學であれ、美術であれ、大衆文化であれ、それ以外の何であれ、フランスといふ名稱から切離すことが出来ないものと私達とのつきあひはすでに百年を越し、フランス或はフランス的なものは日本の近代と淺からぬ因縁を有するのだから、私達は過去のフランス體驗を總ざらひして、フランスを見直し、それを一箇の獨立したフランス學にまで昇華させるべきではないのか。と書いて、すぐさま、豫想される反論に應へておかなければならない。近代の日本がつきあふことを餘儀なくされた相手は何もフランスだけではなく、アメリカとロシアをその中含む廣義のヨーロッパではないのかと人は反論するだらう。（この文脈ではアジアのことは考慮に入れなくて差支へあるまい。）これへの返答は、然り、で

ある。私達の過去百數十年の歴史を大きくゆさぶつたのは勿論フランスだけではなかつた。それを忘れてフランスを特別扱ひしてゐるわけではない。實を言へばこのことは、私が思ひ描いてゐるフランス學の内容と大きくかかはるのだが、その問題については後述することになるであらう。

しかし私達の過去のフランス體驗を洗ひ出すことにはいささか特殊な事情がつきまとはざるを得ないのである。桑原武夫の流れを汲んでフランス學の必要を唱へる田邊保は次のやうに述べてゐる。²⁾

フランス觀光に押し寄せる多くの一般大衆が、またフランス文化の蠱惑する香りに引かれてその吸収に血道をあげているフランコフィール (francophilie ≡ フランスびいき) の人たちが意識せずに直觀的に感じとっているものと、フランス的な政治の行動原理のあり方は、どこか根底で相通ずるところがあるかもしれないのである。この祕密をさぐってみようではないか。

田邊氏はこれに續けて、フランス學とは「この祕密をしだいに明らかにすることを目ざす學問であるのかもしれない」と言ふのだが、右の文中の「フランス的な政治の行動原理のあり方」といふのは、國際政治においてフランスがたとへばアメリカのやうな強大國に決して追隨せず、独自の路線を歩まうとすることを指してゐる。そしてこれとの連關におかれたところの、觀光客やフランコフィルが「意識せずに直觀的に感じとっているもの」は要するにフランスの何とも言へない魅力もしくは魔力のことであるが、幕末以來、今日に至るまでどれほど多くの人がそれに取憑かれたことかと思はないではゐられない。この點ではドイツもイ

ギリスもロシアも、アメリカでさへ、それに夢を見た日本人が少なからずるとはいふものの、蓋しフランスには及ばないであらう。私達にとつてのフランス學が無國籍のものであつてよい筈はないのだから、それが私達におけるフランスへの魅力の一つの、そして大きな契機にして成立つことに反對するいははないのだが、このことではもう一つ考へておきたいことがある。

田邊氏は明言してゐないが、「フランス的な政治の行動原理のあり方」には私達にわかりにくいところがあると思ふ。シラクが國際世論の反撥を無視して強行した核實驗のことは（わからなくもないから）問はないとしても、かつての米ソ冷戦時代にドゴールが執つたところの、西側陣營に屬する意志があるのかないのか往々にして判然としない態度をどれだけの日本人が眞に理解しただろうか。少なくとも私にはそれが今以てよくわからない。そこで次のことは（私だけではないと信ずるので「私達」と書くことにするが）ドゴールにしろ、「フランス的な政治」にしろ、それはほんの一例であり、すべてフランス的なもの、或はフランスのものには私達の理解を超えたところがあるやうに思ふされる。

或る對象が理解し難い故にかへつてそれに魅力を感じるといふことは個人の生活に時たま起ることであるが、日本人とフランスの關係もそれに似てゐると言へるのではないか。ここ百數十年の間、少なからざる數の日本人をとらへたフランスの法外な魅力はさうとでも考へなければ説明がつかない。そしてわからなさを突詰めて、尙、それが消滅しなければ、それは違和感の域にまで高まるであらう。このやうなわからなさ、もしくは違和感をフランス學の中へ持込んでいけないといふ理由があらうとは思へない。むしろそれがあるならあるで、そのことを率直に認めたと、私達におけるフランスへの理解はより本物になるだらうといふ氣

がする。

この小論の中で試みるのは、フランス學の名において發表された論稿を、以上に述べたことを念頭に置きながら檢證することであるが、それをするためには、いふところのフランス學と私自身の關係を明らかにしておく必要があらう。ありていに言つて私はフランス學の實踐を目指して動いてゐる人間ではない。しかしフランスの文學を中心とする文化に多少は親しみ、その受容をめぐる悲喜劇を何ほどか知つてゐる人間として、フランス學の主張を第三者的に聞き流すことが出来ないのも事實であり、一步進めて言へば、將來、私なりのフランス學を組立てて見たい、いや、そんな高望みは起さないとせめてフランス學の達成に一臂の力を假したいといふ位の氣持は持つてゐる。が、訪れるかどうかわからない將來のことを話題にすべきではないだらう。今は唯、日本にフランス學が出来ることを夢見てゐるだけ言つておく。そんな私が以下に記すことは、丁度、自分では小説一つ書けない癖に他人の小説の品定めばかりしてゐる文藝批評家の文章のやうになるかも知れないが、それは仕方のないことと觀念するより他はない。

以下に取上げるのは單行本『フランス學を學ぶ人のために』の中に收められた田邊保と中山眞彦の論文である。

二

田邊保「フランスのアイデンティティ」は表題が示す通りフランス學はフランスのアイデンティティ（フランス語では *identité* アイデンティテ）すなはちフランスの氏素性（田邊氏の用語）の解明に努めなければならぬことを述べたものであり、すべて物事はその何たるかがわから

なければ對處することが出来ないのだから、田邊氏はその主張の基本において少しも間違へてはゐないであらう。それはよいのだが、早速ここで田邊氏の文章のあり方に目を向けると、たとへば次のやうな文がある⁽³⁾。

わたしたちとしては、けっきょく、こういう國民の遺産として結集され、集大成されてきた複雑で巨大な一つの独自の「かたまり」を「フランス」として讀みといいくほかはないのだが、接近の手がかりとしては、先にもなんとか指摘してきたように、いくつかの歴史上のエポックの有意義性を吟味すること、この「複合體」の組成分として取り出しうる諸因子の關與度の測定をすることなどの途がある。

この文は「フランスのアイデンティティ」の終り近くに出て來るものであり、拙論の讀者にはこれだけでは何が言はれてゐるのか理解出來ない筈なので、私はそれを追つて説明しなければなるまいと思ふが、今、問題にしたいのは右の引用文の内容のことではなく、そこに感知される文章の調子のことである。フランス學とは廣義のフランス文化を扱ふ學であるとの見地よりすれば、その文體は——それが至難の業であることを承知した上で言ふのだが——フランス文化の特質に見合ふものであるべきだらう。その點、右の文の前半はともかく後半の部分はまるで自然科学の論文の一節を讀まされてゐるかの如くであり、學者的な身構へが大きく過ぎる。もつともこの文は未だしも意味を正確に傳へてゐるが、次の文に至つてはその表面上の意味すら私にはすんなりとは呑み込めない。

そして現在、ラングとして一應完成されたフランス語は、カトリシ

スム・キリスト教をベースとして立つ「實體」觀念をうつし出す、排他的なまでの唯一の眞理性を主張する根據となりうるだけの機能をいつの間にかそなえてしまっているふうなのである。

「言語。言葉」を意味するフランス語のラング *langue* が日本語の文章の中で無造作に使用されてゐることには、田邊氏の論文の讀者の多くがフランス語を解するであらうことを考慮して目をつぶるとしても、明らかにこれは舌足らずの惡文であり、折角の思考が適切な表現にめぐりあふことなく浮き上つてゐると言はざるを得ない。フランス學を學問的作業の對象とばかり考へるからかうなるのだらう。この「學」は文字通り學問の一種であるには違ひないが、狹義の學問がさうなりがちな、表現の一般性の缺如をそれに見れさせたいといふ切なる願ひを私は溫めてゐる。

必ずしも平明に書くことを求めてゐるのではない。いふまでもなくフランス學は通俗書に材料を提供する筋合のものではない。フランス文化の中に晦澁な要素を發見したら、それを表現するに晦澁な文章を以てするのはむしろ當然のことであらう。しかし田邊氏の文章の讀みにくさはどう見てもそのやうな晦澁さとは別物である。フランス學はフランスの香りを立ち昇らせるものであつて貰ひたいと思ふだけに、自らそれを行ふことが出来ないかも知れない我が身を顧みずに、敢へて以上の苦言を呈しておく。

さて田邊氏はフランスのアイデンティティをその自然の中に見出さうとする試みを幾分懷疑的に取上げ、「フランス人の自己満足と外國に對する好奇心の乏しさを、天與の地理的好條件に支えられたものと斷

定」する桑原武夫の所説を紹介したり、「現在のフランスに廣がる自然は、どんなに豊かで奥が深そうに見えても、隅々まで人工の手が行きわたっていて、作られた自然であることを知っておきたい」と述べたりするのだが、前者の（引用者による）傍點部分と後者の全文は誰しもフランスにおいてほとんど直観的に感じ取つてゐることであり、だからこの二つはフランス學の中に位置づけられて然るべきであるが、それにしてもフランスの何たるかをその自然から説明しようとする試みにはいささか無理があるやうに思はれる。自然は後景であらう。それに支へられた前景は歴史である。

田邊氏はフランスの歴史家ブローデルがクロヴィスもジャンヌ・ダルクもルイ十四世も問題にせず、大革命すら無視して、鐵道の誕生と小學校の普及の中にだけ、統一フランスの成立を看て取らうとする態度を次のやうに批判してゐる。

それならば、もう一つの傳統的フランス——クロヴィス受洗の際のあの不思議、ジャンヌ・ダルクの驚嘆すべき事業、南佛ルルドでの聖母マリアの奇跡の出現といった一連の「神祕」^{ミステール}を據りどころにしてきた深層の『フランス』は、今はもうどこへ抑壓されてしまつたのだろうか。

田邊氏は更に近代以前の、傳統的なフランスを捨てるのではなく、歴史上のモメントの幾つかに目をとめた方がよくはないのかと述べて（同氏の記述の順序は前後が逆であるけれど）フランス史の中から特にクロヴィスの受洗とシャルル禿頭王の即位を取出し、そこにフランスをフランスたらしめる最も古い要素を探り當てようとしてゐる。

西曆四百九十六年にフランク王クロヴィスがキリスト教に改宗したことはフランス・カトリシズムの源流をなしたし、西曆八百四十三年のヴェルダン條約でシャルル禿頭王がシャルルマーニュの大領土の西半分の領有を認められてフランクシア王を稱したところからいへゆるフランスは始まつた。それはたしかなことであり、田邊氏が「クロヴィスⅡシャルル禿頭王とつらなる線上に」フランスの原初的なアイデンティティを求めることには一應の賛意を表しておくが、このことでは氣懸りなことがないわけではない。いや、氣懸りといふよりは、ここまで書き進めて來て不安を感じ始めたのである。話をフランスから日本に移すと、佛教の傳來も大化改新も鎌倉幕府の成立も、また應仁の亂も徳川幕府の成立も明治維新も、そのどれか一つでも缺けてゐれば日本は私達が知つてゐるやうな日本ではなかつただらうと思はせるやうな出來事ばかりである。しかしこれらの歴史的事件を如何に注視しても、そこから日本の實像が浮び上つて來るといふわけには行かない。實像を知るためには知識と感覺を同時に働かせなければならぬが、それは他ならぬ日本人にとつてすら極度に困難なことである。フランスの場合にも同じことが言へるのではないか。ましてフランスは外國である。フランスのアイデンティティといふが如きものが私達に本當につかめるのだらうかといふことを、田邊氏への批判としてでなく、考へないではゐられない。しかしすでに述べた通り、フランス學といふからにはフランスのアイデンティティにこだはるべきである。この矛盾をどうすればよいのだらう。そもそもフランス學は成立し得るのかといふ最初の問ひ掛けに心ならずも連れ戻されさうな氣がする。

田邊氏は革命を機にして成立した共和制に結びつける形で nation

(國民を主體にした國家)を取上げ、それをEtat(體制としての國家)に對立させ、civilisation(文明)の觀念はnationと密接な關係にあると説いてゐる。これは餘りにも大きな問題であり、この小論の中で私見を述べる餘裕はないのだが、唯、「共和國とは、『社會集團によつて權力の行使の委任を受けた者が、公衆の權益のためにこれを行なうような政治體制』をいい、ひとりの人間が權力を保持する『君主制』(monarchie)とは對立する」といふ一文は氣に掛るので、そのことを述べておきたい。

右の規定は田邊氏の意見といふよりは、同氏が第五共和國憲法の條文を解説したものであらう。従つてこの規定にどんな問題が含まれてゐようと、それは田邊氏のあづかり知つたことではないと言へさうであるが、フランスの共和制といふ特殊な文脈から離れて、一般論的に考察すれば、君主制を「ひとりの人間が權力を保持する」ものと見做すことは誤りである。それはルイ十四世のやうな絶對君主の場合に見られることでしかない。そのことはフランスの隣國であるイギリスの立憲君主制を想起すれば明白であらう。

田邊氏のことはひとまづ忘れて書くのだが、私達にとつてのフランス學はあくまでヨーロッパ學の一部であるべきだと思ふ。ヨーロッパ學といふ時、それはヨーロッパを他者として認識することを前提にしてゐる。フランスとイギリスとドイツが互にどれほど違つてゐても、私達から見ればそれらがヨーロッパであることに變りはない。そこには日本と異なるところの、ヨーロッパといふ名辭で括るしかないものがあるので、それが百數十年の間、日本をよきにつけ、あしきにつけ動かして來たのであると言へよう。とすればフランス學を通してフランスへの知見を深めることがヨーロッパのそれ以外の地域を無視したり、忘却したり、輕蔑し

たりすることであつてはならない筈である。フランス學は文字通りフランスを知る學であると同時に、何か入組んだ名狀し難いやり方で、全ヨーロッパの構造を垣間見させるものであるべきだらう。フランスの共和制の研究は何處かで(たとひそのことが明示されなからうと)イギリスの君主制についての知識及びそれへの評價と交はることが望ましいのではないか。これはフランス學の獨自性をも、すでに述べたやうなその特殊性をも決して損ふものではない。フランスがフランスでありながらヨーロッパでもあることにおいて、蓋しそのことにおいてのみ、フランス學は私達にフランスを眞に所有させるであらうと思はれる。

文化よりは自然科学が對象であることを思はせると先に評した、「いくつかの歴史上のエポックの興味性を吟味すること、この『複合體』の組成分として取り出しうる諸因子の關與度の測定をすることなどの途がある」といふ一節を解説すると、これは、「フランスの歴史から幾つかのエポックを選び出して、それがどんな意味を持つかを吟味することが一つの方法として考へられるし、また、フランスといふ『複合體』の構成要素として取出し得る事柄の一つ々がそれにどの程度の割合で關與したかを調査することもやはり有力な方法である」といつたほどの意味である。

三

一國の文化と歴史と國民生活は、と書き始めて、すぐさま、このやうに文化を歴史及び國民生活と並置する教科書的なやり方は正しいのだらうかといふ疑念にとらはれるが、他の言ひ方が思ひつかないので止むを得ずかう書くとして、以上三つのどれもその國の言葉と不可分の關係に

あるのだから、フランスについて述べる、その議論の中でフランス語について述べないとすれば、それは片手落ちといふものであらう。フランス語の中ではフランス語の特質をあげつらふ必要があらうと思はれる所であるが、それが極度の困難を伴ふ事情を感じすることはいたとたやすい。論者はフランス語にほだ熟達してゐなければならぬし、しかもその特質を、フランス語の心得がない讀者にも或る程度まで理解させる手腕を求められるからである。その點、中山眞彦「フランス語はどういう言語か」はなかなかよく書いてゐると思ふ。

拙論の一の中で、フランス語は私達の過去のフランス體驗に根差したものであるべきだといふ意味のことを述べたが、このことで更に言へば、フランスに關する私達の誤解でさへそこではそれ相應の位置を占めるフランス語の出現を望みたいといふ氣持に誘はれる。そのやうなフランス語において誤解はそれが誤解であることを明らかにされながらも、全くの無意味として扱はれはしないであらう。フランスはおしやれとファッションの國とか、自由と人權を尊重することにかけては世界に冠たる國であるとかいふ思ひ込みがそれに當るといへようか。

しかし物事には限度といふものがある。フランス語について屢々囁かれ、一般大衆のみならず一部の知識人すらとりこにしてゐるかのやうに見えるところの、「フランス語は世界で一番美しい言葉だ」「フランス語は明晰だが日本語は曖昧だ」といつた類のフランス語讚美論はよろしくフランス語から閉め出して貰ひたい。フランス語をその中に含む複数の言語に精通してゐなければ言へない筈のかういふことがよく言へたものである。フランス語として必要なのはフランス語の特質をもつと冷靜に見極めた議論であらう。

中山論文が、「明晰なフランス語そして明晰ならざる日本語」といふ

妄念を打破するところから始まつてゐることは痛快であるが、このフランス語の明晰さといふことで中山氏は十八世紀フランスのリヴァロールの言葉、「明晰でないものはフランス語ではない」(Ce qui n'est pas clair n'est pas français.)を組上に載せてゐる。⁽⁴⁾これはフランス語の初學者が必ず何處かで出會ふ有名な一句であるが、中山氏はこの名文句の前提に當る部分に讀者の注意を促してゐるのであり、それによるとリヴァロールは、「フランス語はまず文の主語を述べる。ついで行爲を表す動詞を述べ、最後に行爲の目的(語)を述べる。これこそがすべての人間にとって自然な論理である」と記してゐるのださうである。しかし右の語順が當嵌まるのはフランス語だけではない。そこで、「リヴァロールによれば、同じ西歐語でもラテン語や英語、ドイツ語などは『S—V—O』の語順がしばしば亂れる」といふ文が登場することになる。

これで大分明らかになつたと言へるのは、リヴァロールが「すべての人間にとつて自然な論理」と述べた時、彼の頭の中にあつたのは、如何に「すべての人間」と稱されてゐても、實は西歐語を操る人間だけだつたらしいことである。リヴァロールにおいて、S—V—Oの語順に従ふことなく表現する人々のことはごく自然に考慮されてゐない。とはいへ中山氏も認めてゐる通り、リヴァロールが西歐語以外の言語世界に想到しなかつたことを責めるのは酷といふものであらう。十八世紀のフランス人にそこまで期待するわけには行かない。問題があるとすればそれは、「明晰でないものはフランス語ではない」といふ命題をさも唯一の、そして絶対の規範であるかの如く振りかざす日本人の方である。

およそフランス語に限らず、言語としての言葉の取扱ひにはいやが上にも慎重でなければならぬと思ふ。たとひ語順の基本がS—V—Oではなくても、或は私達の日本語のやうに主語や動詞や目的語があつたり、

なかつたりしても、言ひたいことがはつきり言へるのであれば、その言葉はそれなりに明晰なのである。中山氏の實例を借りれば、*Au dîner, on nous a servi du poulet.* (夕食で人は私達に鳥肉を出した)といふフランス語と「夕食の御馳走は鳥肉だった」といふ日本語はどちらも状況を正確に傳へてゐるのであり、明晰さの點で甲乙をつけることが出来るよう筈はない。

もつともこのことでは或はパスカルのやうに或はデカルトのやうに考へたり、書いたりすることにフランス語は適してゐるが日本語は適してゐない、だから日本語は論理の分析には不向きな曖昧な言葉であるといふ異論が出て来るかも知れない。フランスがここまで浸透した日本にパスカルの資性やデカルトの資性を持合せた人がゐても一向に差支へないが、彼等が右のやうに歎くとしたら、それは筋違ひである。そもそもパスカルとデカルトの思考と表現はフランス語によつて行はれたのであるから、パスカルの論理やデカルトの論理がフランス語によつて最も適切に表されるのは當り前の話である。かういふ特殊な事例だけを抜き出して、日本語はフランス語より明晰ではないと斷定するのは輕率の譏りを免れないだらう。フランス語を高く見て日本語を低く見るところからフランス語の特質を浮び上らせることは出来ない相談であると考へておくことにしたい。

フランス語にはフランス語の領分があり、日本語には日本語の領分がある。そしてフランス語の中にフランス語を位置づけるためにはこれと日本語を何等かの(間接的なそれにもせよ)やり方で比較することが缺かせないやうである。

中山氏はそれをしてゐるが、同氏の所論のすべてに言及する暇はない

ので、分析的思考法の名の下に説かれてゐる關係代名詞の重要性と名詞の役割について私見を述べることにしよう。

最初に關係代名詞であるが、フランス語に限らず西歐語が關係代名詞を持つてゐることの意義はどんなに強調しても強調し過ぎることはないとも書いて、ふと、それは關係代名詞がない言葉を國語とする人間が言ふことであつて、當の西歐人には關係代名詞は自明の語法なのだから、彼等はかう言はれるとかへつて迷惑ふのではないかと思はせられる。フランス語はフランスの何たるかを日本人に教へるだけでなく、フランス人にさへ改めてそれを悟らせるところまで高められることが望ましいであらうが、關係代名詞のことでこの課題を達成させることは不可能に近い。それにしてもすでに述べられたこととの結びつきを強固に保持したまま、視點をさつと轉換させて別のことを述べるといふ、そんな藝當を關係代名詞は可能にしてゐる。Allez consulter mon docteur qui m'a toujours aidé. 一旦動詞の目的語として與へられた *mon docteur* が關係代名詞 *qui* を介して他の動詞の主語に成り代るといふこの構造。中山氏はこの文を、「ぼくの醫者に診てもらいなさい、(その醫者は)いつもぼくを助けてくれました」と譯してゐる。日本語としてあまり自然な文章とは言へないが、これは譯者のせるといふよりは、關係代名詞を持たない日本語の中へ關係代名詞構文を持ち込むとかうならざるを得ないことが多いのだ。

ところで關係代名詞は名詞または名詞相當語句を介して使用されるわけだから、次には名詞の役割といふものを考へることになる。たしかにフランス語の「名詞は文を組み立てる大黒柱」であるが、それにくらべると、「日本語の名詞の比重はいたって軽い」と言へるだらう。フランス語を念頭に置きながら考察すると日本語の場合には名詞よりはむしろ

名辭とか名稱とかといふ用語の方が適切ではないのかといふ氣もする。フランス語の名詞が章句に方向性を與へる力を持つてゐるのに對して、日本語の「名詞」にはそれが感じられないからである。

その點、英語の名詞はいふまでもなく日本語的ではなくフランス語的であるが、それでも英語とフランス語の間で名詞の機能を比較すると、英語には單數複數の違ひはあつても男性女性の區別がなく、またフランス語に見られるやうな複數不定冠詞と部分冠詞もないのだから、名詞の質はフランス語の方が高度であると考へられよう。一應のところ、さういふ見方が出来る。とはいへ、このことを裏返すと、英語の（そして日本語の）名詞はフランス語の名詞より案外自由であるとも言へるのだが、この問題はもう少し先に回すことにする。

中山論文の中では言及されてゐないことであるが、フランス語では名詞の役割が大きいところから、それを日本語に譯さうとして、名詞を單なる名詞として譯すのではなく、一つの文章に變へて譯したいといふ誘惑に驅られることが私達にはないだらうか。中山氏はラシーヌの *Mon amour m'entraînait* において、抽象名詞主語の處理といふ觀點から、「私の戀が私を引きずってきました」といふ直譯を斥けて、「ただあなたへの愛にひきずられるまま」といふ譯し方を探つてゐるが、この場合には *mon amour* を獨立させて、「あなたを戀してゐたものだから、もうどうしようもなく」と譯すことも出來さうな氣もする。フランス語では名詞に相當の重味を持たされてゐることをフランス語の少なくとも暗黙の前提として私達は心得ておくべきだらう。

しかし抽象名詞主語はどんな場合にもそのままでは日本語にならないと中山氏がもし考へてゐるのであれば、それは正しくないと思ふ。たしかに、「私の戀が私を引きずってきました」は日本語として餘りにも不

自然であるが、たとへば、「運命は反戰平和主義者の彼を戰場に赴かせた」といふやうな表現は今日の日本語の中ではかなり普通に見られるやうになつてゐる。中山氏が指摘する、「出來事（たとえば戀愛）には、それを引き起こした原因があるはずだ。出來事の本體はこの原因にあり、出來事自體はその結果にほかならない、という考え方が西歐の人間には深く根づいてゐる」といふ、そんな西歐的發想に日本語も馴染み始めたのである。もつともこのことでは、「一つの言語は他の言語が語るすべてのことを自分のなかに取り込むことができる。ただしそのさいに、相手の言語體系を換骨奪胎し、また同時に己れの言語體系を一部ではあれ改變するといふ大變な工夫が必要である」といふ中山氏の主張は傾聴に價するといへよう。

ここで問題にしたいのは、「相手の言語體系を換骨奪胎し、また同時に己れの言語體系を一部ではあれ改變する」ことが比較的しやすい言葉と、しづらい言葉があるのではないかと思はれることである。いふまでもないことながら、外來の要素に適應することが巧みな言語體系は前者であり、その逆が後者である。そしてフランス語はどう見ても後者であらう。再び名詞に即して考へると、筆者は先にフランス語が英語にはない性の區別と複數不定冠詞と部分冠詞を持つてゐることを述べたが、ここまで名詞が「進化」してしまへば、自らフランス語にはいはば純血主義が生じて、外國產の名詞は容易にフランス語の名詞の仲間入りをすることが出來ないといふ事態がもたらされることは明らかであらう。以前に或るフランス人がかう語るのを聞いたことがある。「*musique* が女性名詞であるのは理屈以前の事柄であり、我々フランス人にはこの語の音樂的リズムからして、*la musique* とは言へても、*le musique* とは決して言へない……」外國生れの名詞がそのやうなリズムを自分のものとす

るまでにはどれだけの時間が掛ることだらうか。

フランス語にくらべると英語と日本語の方が名詞の数は^{かず}圧倒的に多く、しかもその中で外來語が随分幅を利かせてゐることは言語における「自由」の産物であるに違ひない。勿論、その「自由」が過剰になつて、そこから困つた問題が出て來ることはあり得るし、その典型が日本語であらうけれど。

フランス語の案外な「不自由」を通して、フランス人の意識がどんな「自由」の域に達してゐるかといふことが解明されれば、それはフランス學の白眉と稱するに足るものにならうと思はれる。

註

今回の資料は本文の中でも述べた通り『フランス學を學ぶ人のために』（田邊保編 世
界思想社 一九九八年八月十月初版）から採つた。

- (1) これは右の書物の「はじめに」（執筆者は田邊保）の中に引用されてゐる。
- (2) 第1章「フランス學事始め」の七頁。
- (3) 以下、第2章「フランスのアイデンティティ」（九―二十六頁）に據る。
- (4) 以下、第4章「フランス語はどういう言語か」（一二八―一四三頁）に據る。